

# 柳家 小三治 I

Disc 1

## 〔猫の皿〕

- 1 出囃子「二上りカッコ」→マクラ [39:21]
- 2 憩い [5:24]
- 3 宝物 [10:45]

Disc 2

## 〔長短〕

- 1 出囃子「二上りカッコ」→マクラ [37:33]
- 2 たばこ二服 [13:48]
- 3 飛んだ火玉 [3:43]

「猫の皿」 07年7月21日 第71回朝日名人会  
 「長短」 08年7月19日 第81回朝日名人会  
 有楽町朝日ホールにて収録

三味線・小口けい(猫の皿・長短)

田中ふゆ(長短)

松尾あさ(猫の皿)

笛・柳家三之助

撮影・横井洋司(録音時の会場撮影)

エンジニア・内藤哲也

デザイン・米澤潤、渡辺来

ディレクター・京須借充、吉岡勉(SMDR来福)

※当CDには、現代においては一部好ましくない表現も含まれておりますが、  
 古典落語が成立した当時の時代背景や芸術性を考慮してそのまま収録しています。ご了承ください。

○新商品情報はこちらへ  
 来福レーベル公式HP <http://www.t10107.com/raifu/>

「取り扱い上の注意」ディスクは尚曲具・指紋・汚れ・キズ等をつけずに取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは乾いた柔らかい布で内  
 周から外周に向かって放射状に軽く拭き取ってください。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないでください。●ディスクは尚曲具・指紋・キズ・油  
 性ペン等で文字や絵を書いたラシール等を貼付しないでください。●ひび割れや変形または接着剤等で補ったディスクは危険ですから絶対に使用  
 しないでください。●保管上の「注意」直射日光の当たる場所や、高温多湿の場所は保管しないでください。●ディスクは使用後、元のケースに入れて  
 保護してください。●ケースの上に乗るものを置いたり落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

ご購入いただいた商品に関するお問い合わせ・株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント  
 〒102-8353 東京都千代田区六本木4番地5 電話 03-3351-5111

ソニー・ミュージックエンタテインメント  
**to music**  
 110107.com

Sony Music Official Site <http://www.sonymusic.co.jp/>

# 『猫の皿』

かつては「猫の茶碗」の題が主流だったが、五代目古今亭志ん生が「猫の皿」の題で好んでラジオで演じたあたりから「皿」が本流となった観がある。

江戸期までなら人間の飯を盛るのはほとんど例外なく「茶碗」だから「猫の飯茶碗」は自然な命名だが、箸も使わない猫には飯皿のほうが実際の、この「名器」も茶碗よりは皿に近い形状だったものと思われる。絵高麗の梅鉢という呼称が絵解きになるだろう。

明治後半の名人・四代目橘家圓喬による速記録があつて、題は「猫の茶碗」であるにもかかわらず随所で「皿」と言っているのも興味深い。

圓喬には師・三遊亭圓朝かぶれの高尚趣味があつて骨董の癖を好んだといわれる。若い頃に圓喬に心酔し、あやしげな骨董を集めていたという志ん生が図らずもこの風変わりな逸品を後世に伝える役割を果たした。

風変わりなだけにこの癖は演者を選ぶ。むかし志ん生いま小三治。「猫の皿」の不思議な魅力はここに尽きるのではないか。話術の基盤では両極に近いこの新旧の二人だけが多くを語らず理詰めにもならず、何食わぬ調子で人間戯画の域に遊んでいる。

口数が多くて機敏な果師——つまりお宝買い付け人は、口数が少なく一見は純な茶店のおやじの敵ではなかったのだ。

その表現は凡百の演者には届かない領域であつて、茶店のおやじも出身は果師かなどの解釈はあらずもがなではないか。

ま・く・らでは源平合戦時代の語り草、平敦盛と熊谷直実、平忠度と藤原俊成の逸話が語られ、今なお脈々と流れる日本人の精神というよりは魂にまで触れている。変幻自在のま・く・らとしては笑わせるよりも聴かせる要素がとても強い。本席「猫の皿」との対照を狙っていたのだとしたら憎いけれど。

# 『長短』

かつては説明的に「氣の長短」ともいった。ただ「長短」では即物的にして抽象的だが、そう圧縮してしまったほうが噺の奥行きが深くなるように思う。本題のみなら十五分で御の字の小品だが、小さな穴から覗いた内部の大きさに驚かされることもある。

古くからある小咄で、かの三代目柳家小さんもやったことがあるというが、「長短」が近現代の高座に躍り出たのは昭和の大戦のあとのことだと言つてよいだろう。

かつて大阪で修業したこともあった、あの「芝浜」の名手、三代目桂三木助が東京に持ち帰り、僚友の五代目柳家小さんに教え、小さんが天下一品にまで「長短」を磨き上げた。おそらく三木助よりはずっと小さんのニンに合う噺だったのだろう。

極端に対照的な二人の噺だから、白と黒に、水と油に、単純明快にやれば、たやすいネタだと割り切ったが最期、性格が違つても長く付き合つてきた長七と短七の、とても人間的な心の戯画は消滅していくばかり。大多数の演者はこの日限りで喧嘩別れする二人しか描いていない。

二人の対照を極端なテンポ設定で表面的に描くのみ「長短」は珍獣か怪物の対話に墮してしまい、この上なく不自然で人間不在も甚だしい。

十代目柳家小三治の「長短」は師の五代目小さんとは演者のキャラクター、イメージが異なるから、師ほどまろやかではないが、二人の「人間」の実在感では師にまさつていて堪能させられる。この日の着物の損傷はだいぶ痛手だったが、長と短はこれからもゴタゴタしながら末永く付き合つていくのではなからうか。

むしろこれは縮図だから極端ではあるが、それが楽しい笑いに直結してこそ大人の落語であり、芸でもある。

ひとことでは表しにくいカステラのうまさもまた大人の味なのだろう。

# 柳家 小三治 II

## Disc 1

### 〔青菜〕

- 1 出囃子「二上りカッコ」〜マクラ [34:16]
- 2 真夏の庭 [22:28]
- 3 裏長屋の夏 [17:11]

## Disc 2

### 〔鰻の幫間〕

- 1 出囃子「二上りカッコ」〜マクラ [10:45]
- 2 なけなしの一人客 [17:33]
- 3 鰻の蓬屋 [16:20]
- 4 言いたくはないが [18:38]

〔青菜〕 11年6月18日 第110回朝日名人会

〔鰻の幫間〕 01年6月23日 第18回朝日名人会

有楽町朝日ホールにて収録

三味線…小口けい、松尾あさ(青菜)

小口けい、小松美枝子(鰻の幫間)

笛…桂やまと

撮影…横井洋司(録音時の会場撮影)

エンジニア…内藤哲也

デザイン…米澤潤、渡辺来

ディレクター…京須借充、吉岡勉(SMDR来福)

※当CDには、現代においては一部好ましくない表現も含まれておりますが、古典落語が成立した当時の時代背景や芸術性を考慮してそのまま収録しています。ご了承ください。

○新商品情報はこちらへ

来福レール公式HP <http://www.110107.com/raifuku/>

〔取り扱いはご注意ください〕ディスクは両面共、指紋や汚れ、キズ等を付けないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、乾いた柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード用クリーナーや消音剤等は使用しないでください。●ディスクは両面共、指紋、キズ、油、汗、性香などで文字や絵を覆ったり、シール等を貼付しないでください。●UV光線や熱、または接着剤等で損傷したディスクは、危険なことから絶対に使用しないでください。●保管上のご注意ください。●放射日光の当る場所や、高温多湿の場所には保管しないでください。●ディスクの使用前後、必ずケースに入れて保管してください。●ケースの上にも重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。



ご購入いただいた商品に関するお問い合わせは、株式会社「ハーモニジ」MUSIC CENTER  
〒104-8560 東京都千代田区千代田4番地5 電話 03-6456-5111  
T-ONLINE 東京都千代田区千代田4番地5 電話 03-6456-5111  
Sony Music Official Site <http://www.sonymusic.co.jp/>

# 『青菜』

元来は上方の噺だが、江戸東京でも古くから演じられてきた。鞍馬山、牛若丸が無造作に引き合いにされるあたりに西の所産の面影を見る思いがする。焼酎と味噌のブレンド「直し」の本場は上方だが、このお屋敷の旦那様夫妻のたたずまいは、大阪・船場の商家よりも東京の実業家あるいは明治の官僚に似合うところがある。ガラスのコップはいかにも明治の東京向きだ。

噺の前半で手本となることばや動きが仕込まれ、後半でパロディのしくじりが笑いをかもす。「青菜」の基本は「鸚鵡返し」にあるが、前座噺ランクのプリミティブな鸚鵡噺とは格が違う。「時そば」のごまかし勘定のようにヒイフウミイと手際よくしゃべっても事は済まない。「青菜」はパターンを鸚鵡噺に借りて人間を語っている、なかなか

か手強い噺だ。演じる噺家自身が鸚鵡のようにしゃべっていは話にならない。

「青菜」の夫婦は無邪気にお屋敷ごっこをしているように見えるが、どういう風の吹き回しか、この日は大人のお屋敷ごっこにのめり込んだ。なぜかはわからないが、日頃のごとく亭主をへこませる女房もこの日は素直に押し入れサウナに閉じこもった。

たまには柄にもないことに熱中しようじゃないか。これはあんまり金のかからない遊び、道楽なのだ。万年長屋住まいの夫婦が珍しく遊びに目覚めたのだ。

そう、なんでも遊びです。周到にま・く・らを仕込んだ柳家小三治のさりげないひとことが、この日の一時間の高座を端的に表している。遊びを見つけよう。俳句ばかりじゃない。どんなものだって遊べるのだ。

「植木屋さん、ご精が出ますね」。お屋敷の旦那様のこのひとことでも・く・らから「青菜」に入る。遅れをとった客席は後追いの笑いと拍手で応えている。

これも遊びだ。この演者だけがやれる遊び。

# 鰻うなぎの幫間たいご

実際にあつた小事件から生まれた噺だといわれている。ただし、その事件がどのようなものであつたのか、誰がこういう噺にまとめたのか、などの経緯は明らかではない。だつたそうで、の域にとどまつているのだが、そのわりには噺の完成度は高く、幫間噺の名作とされている。

なるほどこれはありそうな話だ。噺のどこをとつても不自然な点はなく、誇張があつても無理がない。ことのなりゆきの行き着くところこんな結果になつたまでのことで、いつ誰にこんな不運が見舞うかしたのではない。お互いに用心しましょう、という程度でありふれた一件ではある。

ありふれた実話をそのまま落語にしてもあまり冴えた噺にはならないだろう。そこで――、と往年の噺家AがBが頭をひねつたかどうかはわからないが、主人公が幫間であること、鰻屋がこの上もなくオンボロであることが噺のおもしろさに、名作指数に大きな貢献をした。特別な稼業と特別な舞台装置が、ありふれた噺にさせなかつたということではないだろうか。

この噺で指を屈すべき先人は八代目桂文楽一人あるのみだが、文楽は幫間噺のスーパー名手ふりを鮮やかに披露しただけで、前述の二つのポイントは外し気味だつた。野だいこの卑しさと悲哀が蓬屋の鰻屋をバツクに踊ることはなかつたのだ。

ポスト文楽の「鰻の幫間」は、といえれば十代目柳家小三治に尽きる。文楽の演じ方とは水と油の関係に近いから、文楽流こそ至上とする人たちには、小三治演じる野だいこの姿が見えないだろう。軽いいとはいえない二棹の羊羹を手に酷暑を行く野だいこの午前を文楽はほとんどカットしていたから、鰻屋の女中にまで手荷物を詮索される不愉快など、もともとなかつたのだけけれど――。

〈京須借充〉



# 『付き馬』

かつては「早桶屋」という題にも市民権があり、「附馬の附馬」の表記も有力だったが、昭和戦後にはほぼ「付き馬」で一本化された。戦後のラジオ落語興隆の副産物かとも思われる。

噺全体にかかわる「付き馬」が題としては最良だろうが「早桶屋」も捨てがたい。早桶屋が噺の終盤を意外な方向へ導き、噺のカラームも変化する。同じように遊里を騒がす「居残り佐平次」よりも噺の奥行きはずっと深い。「付き馬」のキーパーソンは早桶屋のおやじではないのか。最後は意外に平凡な逃げ口上で姿をくrams男よりも人物像が確かといえよう。

つまり、かの不屈きな客と間抜けで甘い若い衆とのやりとりで進行していく限り、この噺はおもしろおかしい廓噺ではあるけれど醒醐味というほどのものは生まれない。遊里のシステムや浅草界隈の風俗が遠いものになった今日に「付き馬」が生き残るのは至難ではないだろうか。

早桶屋も歴史物の稼業ではある。そうであるならますます、早桶屋のおやじに実在感を与えられない演者には、この噺は猫に小判ということになるだろう。

大正期の才人にして名手、初代柳家小せんのすぐれた演出が五代目古今亭志ん生、六代目三遊亭圓生の両雄に伝わり、それが後輩へと広がって多くの秀演があるが、早桶屋のおやじの表現については、十代目柳家小三治が群を抜いている。早桶屋の位置付けを明確にして噺の彫りを深くしたという点においては、小三治の「付き馬」が昭和の名人たちを引き離している。

楽しみは生きていればこそ。さりげなく話を変換して小三治はしばし、棺桶を語っている。じつは解説も講義もやれる噺家。柳家小三治は必要とあらば気儘な自分を一休みさせることができる人なのだ。

# 『二番煎じ』

その昔、民間で広く愛用された煎じ薬。干した薬草類を水に浸して長時間煎じ詰めて飲用した。一回の煎じではまだ薬効成分が残るので、二番、ときには三番の煎じにかけた。

抽出した薬効エキスを買って飲用することが一般的となり、あまり生活の場で薬を煎じない時代になっても「煎じ」のことは残っていて「煎じ詰めれば」は現代の会話にも用いられ、「二番煎じ」はこの名作落語の題名ばかりでなく、新味や創意の乏しいこと、焼き直し、コピー的、類型的、陳腐なことなど多分にマイナスな評価のことばとして使われている。

この噺の題名としてはサゲもふくめて本来の煎じ薬の用語に沿っていて、煎じ薬全盛時代が偲ばれる。

元来は上方の噺だが、上方落語が一時衰退期に入った大正から昭和前期にかけて東京の五代目三遊亭圓生が十八番にしたこともあって、一時は江戸東京の噺のように思われていた。町衆の自治行為という点では上方的だが武士（役人）の存在感がたしかな点は江戸風で、大火への恐怖というベースも江戸にふさわしい。

いい大人が衆の勢いでついつい調子に乗って禁断を侵してしまう。ありふれたテーマのようであるが、類型が少ない部類に属す噺だ。人物それぞれの成熟度が「味噌蔵」より何段か上だから、宴変じてパニックとなる描写にもいつそうの手応えがなくてはなるまい。噺の冒頭から終始一貫登場人物一人ひとりに鮮やかな個性を与えた柳家小三治の「二番煎じ」は東西落語界の至宝ともいえるのではないか。

江戸期は肉食が禁じられていたかのようにいう説もあるが、裏では結構楽しまれ、食べさせる店も肉を売る店もあった。名目は「薬食い」。飲むのも食うのも建前は「薬」なのだ。

〈京須借充〉

朝日名人会ライヴシリーズ 134

# 家小三治

IV

Disc 1

## 「厩火事」

- 1 出囃子「二上りカッコ」〜マクラ [21:10]
- 2 今日もまた [11:33]
- 3 訓話 [11:32]
- 4 思い切って [04:49]

Disc 2

## 「品川心中」

- 1 出囃子「二上りカッコ」〜マクラ [17:22]
- 2 いつそ心中を [16:33]
- 3 その日 [09:46]
- 4 決行 [05:36]
- 5 騒動 [10:35]

「厩火事」 10年10月16日 第103回朝日名人会  
 「品川心中」 10年3月20日 第97回朝日名人会

三味線・小口けい、田中ふゆ  
 笛・三遊亭金朝

撮影・横井洋司（録音時の会場撮影）

エンジニア・内藤哲也  
 デザイン・米澤潤、渡辺来

ディレクター・京須借充、吉岡勉（SMDR来福）

※当CDには、現代においては一部好ましくない表現も含まれておりますが、古典落語が成立した当時の時代背景や芸術性を考慮してそのまま収録していただきます。ご了承ください。

○新商品情報はこちらへ  
 来福レール公式HP <http://www.110107.com/railku/>

「取り扱い上の注意」●ディスクは両面共指紋・汚れ・キズ等を付けないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは乾いた柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くさび取ってください。●下用クリーナーや溶剤等は使用しないでください。●ディスクは両面共鉛筆・ボールペン・油性ペンなどで文字や絵を画いたりシール等を貼付しないでください。●ひび割れや変形または接着剤等で補修したディスクは危険です。絶対に入力してしないでください。●保管上のご注意●直射日光の当たる場所や、高温多湿の場所には保管しないでください。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管してください。●ケースの上には重いのを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

ご購入いただいた商品に関するお問い合わせ：株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント  
 〒100-8353 東京都千代田区六番町4番地5 電話 03-3351-5111



Sony Music Official Site <http://www.sonymusic.co.jp/>

# 『厩火事』

三日にあげずしゃべっていた演目なのに、ある日突然ぶつり縁が切れてしまう。柳家小三治の嘶遍歴には、他の演者とはずいぶんちがった、そんな性癖のような側面がある。

その嘶に注ぎ込んだエネルギーが俄かに飽和点に達したというところか。かりにそうなのだとしても、それは一定の満足を意味しているのか、たんなる飽きなのか、それとも両者の相乗り状態なのか。

新たなネタに移りしたのかもしれない。とにかく柳家小三治の「根多帳」は変幻極まりなく、しかし深化をとげている。

一方で数こそ少ないがコンスタントに数十年単位で、いわば愛用しているネタもある、この「厩火事」はその代表格に属す嘶だろう。一九八六年十月三十一日に上野・鈴本演芸場での独演会で演じた「厩火

事」のCDもある。「厩火事」は私にとっての人情嘶です、とその頃の小三治さんは言っていた。今もその思いの基本は変わっていないのではないか。典型的な「人情嘶」からは遠い地点で店を開いた「小三治落語」の「厩火事」には生死を分ける切迫したドラマはないが、人の心の表現に満ち溢れている。女髪結いの無邪気な生活感、切りたくても切り難い夫婦の縁。ここには、これこそが「人情」と呼ぶしかない人間日常の喜怒哀楽がたつぷりある。汲めども尽きぬ人の心を演じる楽しみが柳家小三治を引きつけて離さないのではないか。

かつては八代目桂文楽の見事な型の「厩火事」が尊重されていた。一方で五代目古今亭志ん生の日常感あふれる「厩火事」も忘れ難い。だが、総合的に見れば誰よりも人間を描いている小三治「厩火事」がいちばん優れていて、究極の至演の感がある。

このCDの口演では、誰もがいう「人の心を試すのは」の言い訳めいたセリフも消えた。

「この亭主はヒモ。うらやましいよね」。前回・八六年の「厩火事」のとき、小三治さんはこう言ってニヤッと笑った。

# 『品川心中』

明治の昔から演者の数が多く、人気の廓噺といえるだろうが、近年は女郎・お染ともども少し陰りが見えている。この噺に限らず、廓ものの宿命なのだろう。

それでも名作が踏みとどまるのは、噺の情景、廓の風俗、そして登場人物の人間味が存分に描き出されたときだ。柳家小三治にとつて口慣れたネタではないが、背景、風俗、人間味がたっぷり描かれて話に息が通っている。

品川宿の説明、解説はなかなか丁寧で、表向きはそうした論を好まないこの演者の別の一面を強く感じさせられる。細部までキッチリ決めて詳しく語る危険をほどほどに避けて述べるあたりでは、少々高慢に走る演者が多い昨今、考えさせられるものがある。

この噺の「下」、つまり仕返しの場合まで演じる人が少し増えたのはまずは結構なことだが、柳家小三治は「大工調べ」でもそうであるように、噺のエネルギの頂点までで事を終える。仕返しの場合には人間の妙味のタネなど少しもないから演じる気にはならないのだから。

人間性とはいっても、それをほとんど一手にまかなうのは貸本屋の金蔵だ。お染が典型的になるのは廓噺の宿命だろう。彼女が悪女でありすぎて、純情可憐であつても廓噺は成り立ちにくくなる。

柳家小三治の金蔵は他の演者ほど与太郎じみることがなく、普通一般の人にごく近い線でドジに演じられている。そのさじ加減が無類だ。氣位が高い江戸っ子のお染が選んだ男なのだから、ウケを稼ごうと与太郎仕立てにしたのでは噺が台無しになってしまう。

お染が書き置きを書く場面は省略されることが多くなったが、柳家小三治はここで金蔵に字が読めると言わせている。

賭場で腰を抜いたもと武士・橋本光永とは柳家小三治の親友・九代目入船亭扇橋の本名。ここは昔から楽屋落ちの名所になっている。



# 『あのひとといても困るのよ』

二〇〇四年九月二十八日の夜に札幌市郊外の真駒内にある六花亭ホールで柳家小三治の会が催された。ただし落語はやらない。独演会ではない。独唱会というべきか。

柳家小三治は着物姿ではなくステージに立ち、少しは歩み、何曲も何曲も歌を歌った。歌と歌との間に話もした。出来合いの小咄なんかではなくフリートークのようなもの。つまり小三治流ま・くらの短縮版がいくつも語られたのだった。

岡田知子氏がピアノ伴奏をした。歌は「山の煙」(大倉芳郎作詞・八洲秀章作曲)、「白い花の咲く頃」(寺尾智沙・田村しげる)、「砂山」(石川啄木・越谷達之助)、「しおさいの詩」(小椋佳)など。この「独唱会」の録音は翌二〇〇五年初めに「柳家小三治 歌ま・くら

——ボクは歌の好きな少年だった」というタイトルのCDアルバムになっっている。

「ま・く・ら」の小三治が「歌」の小三治になって、こうした会が何回かあったのでは、と思う方もあるのだろうが、実際にはさらに発展することもなく、歌って語る柳家小三治の会は小規模な類似の催し二、三があっただけだった。

この二枚組CD「あのひとといても困るのよ」は二〇〇二年七月十四日に有楽町朝日ホール(マリオン)で行われた「ま・く・ら独演会」の記録で、このときの成果——手応えが二年後の札幌での「歌ま・く・ら」に直結しているのはほぼ間違いないと思う。

この日はふつうの落語はやらないという暗黙の了解があっただけで、九割以上を小三治師匠の意の赴くところに依存していたので、ピアノなどの伴奏は手配しておらず、小三治師匠も普通の着物姿で正座していた。噺家・小三治と歌手・小三治、いや、かつての郡山剛蔵クンとの明確な区切りはないままに途方もなく長時間の催しがスタートしたのだった。

一人の多感な少年が、青年が、いかに恋に浸り恋に破れ、受験や噺家人門で葛藤したか。ここには近代文学にも通じる自我の目覚めが

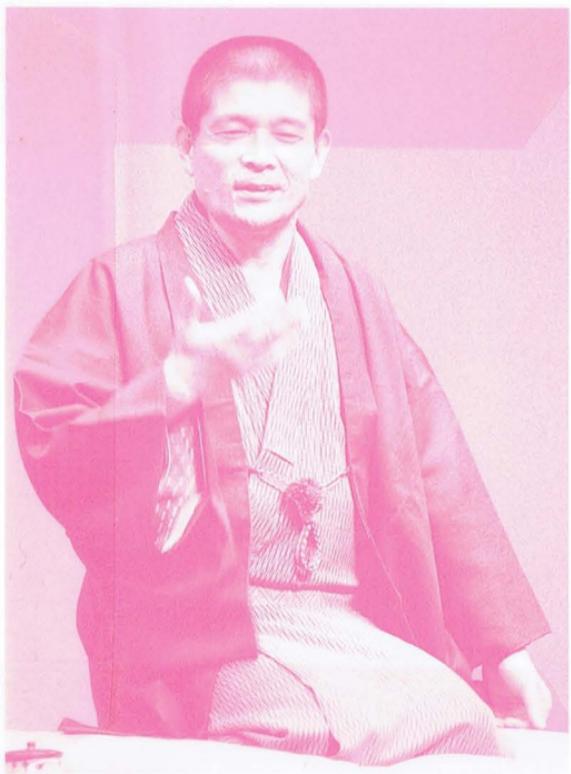
語られているように思う。

それが堅い話に落ちなかったのは練達の話術ゆえではあるが、それ以上に「歌」の効用でもあったろう。その頃の、あの時代のメロディが流れてくれば、たちまち同世代の人たちが共通の心の空間をともにすることがなうのだから。

次第に自我に目覚めていく一人の噺家。このテーマは同じ日の録音CD「人形町末広の思い出」での芸への目覚めにも語り継がれている。

これはしかし二〇〇〇年代初頭の小三治が熱く語ったものであって、その後さらに熟成を深めた人間柳家小三治の核心はまだまだもっと深いところにあるのではないか。

〈京須僭充〉



# 柳家 小三治 VI まくら

Disc 1

「人形町末広の思い出前」 [59:46]

Disc 2

「人形町末広の思い出後」 [60:44]

「人形町末広の思い出」 02年7月14日 第27回朝日名人会

三味線…太田その

笛…柳家三之助

撮影…横井洋司

エン지니어…内藤哲也

デザイン…米澤潤、渡辺来

ディレクター…京須借充、吉岡勉 (SMDR 来福)



○新商品情報はこちらへ

来福レーベル公式HP <http://www.t10107.com/raifuku/>

「取り扱い上の注意」デイスクは両面共、破損、汚れ、キズ等を付けないよう取り扱ってください。●デイスクが汚れたときは乾いた柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。●コード用クリヤーや滑剤等は使用しないでください。●デイスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を画いたり、シール等を貼付しないでください。●ひび割れや変形、または接着剤等で補修したデイスクは、危険ですから絶対に使用しないでください。●保管上の注意●放射日光の当たる場所や、高温多湿の場所には保管しないでください。●デイスクは使用後、元のケースに入れて保管してください。●ケースの上に乗る重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

ご購入いただいた商品に関するお問い合わせ：株式会社「T.M.I.ミュージックエンタテインメント」  
〒102-8353 東京都千代田区六番町4番地5 電話 03-3515-5111



Sony Music Official Site

<http://www.sonymusic.co.jp/>

# 『人形町末広の思い出』

一九六九(昭和四十四)年から翌年にかけて落語協会は三人の二ツ目を真打に昇進させた。六九年三月から三遊亭吉生が三遊亭圓窓に、九月から柳家さん治が柳家小三治に、そして七〇年三月から柳家さん八が入船亭扇橋になった。

世の中には高度経済成長の風が吹き渡っていたが、落語界はまだ石橋を叩いて渡る旧時代の価値観に支配されていて、新真打は二年間でたった三人。

そんなさなかの一九七〇(昭和四十五)年一月の二之席限りで寄席・人形町末広は廃席となった。八〇年代後半から人形町界隈は再び賑いを取り戻したのだが、われらの人形町末広が耐えてそれを待つことはなかった。

期せずして、と言う他はないが、十代目柳家小三治は江戸期からの寄席・人形町末広の高座で真打昇進披露を行った落語協会最後の噺家となったのだった。披露目の口上は桂文楽、三遊亭圓生、林家正蔵、師の柳家小さんがつとめてくれた。病気でなければ古今亭志ん生も口上に付き合ってくれただろう。

人形町での披露目が小三治にはあって扇橋にはない。だからどうだつてことじゃないけどねえ……、と小三治が呟いたことがあった。あの、江戸時代から移築してきたような、古いが木造りの美しさにあふれ、マイクもスピーカーもない末広が真打の門出の地であったかなかったか。そんな思いを共有し得る噺家と少人数のお客の時代に戻ることは——、未来永劫ないのだろうか——。

この「ま・く・ら 人形町末広の思い出」は「ま・く・ら あの人」とつても困るのよ」に続けて二〇〇二年七月十四日の朝日名人会・柳家小三治独演会」で口演されたものだ。当日のプログラムでは「ま・く・ら」ゆえに、二席の高座の演題らしきものは記載されていない。それではあまりにのつべらぼうなので、申し訳同然に「何をお話しませうか」というぼんやりした記載があるのみ。

それではどんな会なのか、今後ますますわからなくなるので、二〇一〇年に朝日名人会が百回を迎えるにあたって、「あの人」と「末

